

加賀文化の粹 【古美術】



初代大樋長左衛門《鉛釉獅子香炉》
—「加賀文化の粹」より—

- 前田家の甲冑・陣羽織 【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 優品選 【近現代工芸】
- 優品選 【近現代絵画・彫刻】
- 日本往生極楽記と一遍上人絵伝 【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 加賀ゆかりの個性派絵師 守景・岸駒 【古美術】
- きらめく美 北陸ゆかりの截金作家たち 【近現代工芸】
- 木と向き合う 【近現代彫刻】
- 優品選 【近現代絵画・彫刻】

※企画展「没後35年 鴨居玲展 —静止した刻—」について

● 令和元年度の新収蔵品について

● 令和2年度の展覧会予定

第5展示室【近現代工芸】

優品選

5月18日(月)～6月14日(日) 会期中無休

陶芸・漆芸・染織・金工・木工・人形の分野の作品をご覧ください。

中憲一作《爛漫》は、満開の桜をやさしい色彩で表した作品です。清水翠東、次いで武腰潤に師事した確かな色絵の技術に基づいた、絵心のある意匠が目を惹きます。

漆芸の寺井直次作《萌春蒔絵水指》は、小さな生命の営みに目を向けています。力強く伸びるゼンマイを金で、モンシロチョウを卵殻の白で、今まさに伸びようとする若い芽を青みがかった白の螺鈿ですっきりと配置しています。

さらに、昨年は木工芸の特別陳列を行い、展示した作家から作品の寄附を受けました。その中から、挽物の中嶋虎男作《枳木造食籠》、指物の福岡則夫作《神代杉柀目造板目象嵌八角箱》を紹介します。

前田育徳会尊經閣文庫分館

前田家の甲冑・陣羽織

5月18日(月)～6月14日(日) 会期中無休

今回は、展示作品の中から加賀藩二代藩主・前田利長が所用した《鯰尾形兜》に注目したいと思います。

加賀藩祖・前田利家も鯰尾形を好んだことは、尾山神社ご所蔵の大小の《鯰尾形兜》から知ることが出来ます。伝存する鯰尾系の兜には鱗をリアルに象つたものもあるようですが、利家や利長が所用したものは、長鳥帽子を意識したように思われます。こうしたところも、文武二道精神の表れと考えることができます。

《鯰尾形兜》前田利長所用

日本画部門では、没後二十五年を迎える畠山錦成の作品を複数点展示します。畠山は、金沢美術工芸大学の前身である金沢美術工芸専門学校設立に尽力し、開校後は講師・教授をつとめるなど、石川日本画に大きく貢献した作家です。

洋画部門では、脇田和《赤い鳥》や《金太郎》など油彩画の秀作を紹介します。子供や鳥を主題とする洗練された抒情的作風は、脇田芸術の真骨頂であるといえます。素描作品もお楽しみください。

彫刻部門では、晴れた日差しや生き生きとした動物たちの息吹を感じることができる作品を紹介いたします。得能節朗《春》は、掌に鳥を乗せ空を見上げる姿から、暖かな日差しを感じます。かわいらしい動物彫刻や可憐な具象彫刻も紹介します。

今回は、茶道美術の背景について述べてみたいと思います。特集「前田家の甲冑・陣羽織」との同時開催により、どうしても、茶道美術の奥底にある生と死の切迫感が意識されます。前田家の文武二道の家風と戦略的な文化政策は、佗茶を大成した千利休の凄絶な生き様への深い共感が原動力となったと考えられます。

美の規範を定めることは権力者へのみ許されることであり、その意味では、利休は豊臣秀吉に対する逆者であり、利休の生き様が「美の下克上」とも言われるゆえんともなっています。そして美に殉じたこの生き様は、利休在世時からあった利休の悪評を超越した寂靜感を人々に強く印象づけます。これが「美の力」であり、前田家が江戸時代を通して徳川家に対抗した「文化力」のモデルでした。

今回も《黒楽茶碗 銘北野》(県文)を展示します。前田家の収集品ではなく、「百万石ブランド」の文化的求心力によって当地にもたらされたものです。

第3・4・6展示室【近現代絵画・彫刻】

優品選

5月18日(月)～6月14日(日) 会期中無休

第2展示室【古美術】

加賀文化の粹

5月18日(月)～6月14日(日) 会期中無休

日本往生極楽記と一遍上人絵伝

6月20日(土)～7月26日(日) 会期中無休

学芸員の眼

入手できないものは写すという、前田家の《一遍上人絵伝》蔵書形態を考えますと、入手は加賀藩五代藩主・綱紀の時代と判断されます。私の前田育徳会本との関わりも三十年以上になりますが、本作に限らず綱紀の蔵書を借用・展示させていただく度に、綱紀の思いがどこにあったのかを自問します。そこで今回は、日本における浄土教信仰の成立・展開の必然的帰結として《一遍上人絵伝》を位置付けてみました。二〇一七年の企画展「よみがえった文化財」では重要文化財指定の七巻すべてを展示しましたが、展示スペースの関係から、各巻の紹介が必ずしも十分にできませんでした。そこで今回は、巻一から四の著色四巻に絞って展示します。

3～5ページに掲載の
展示会については、
会期や内容が変更と
なる場合があります。

前田育徳会本の重文《一遍上人絵伝》の展示は、これまで度々行っています。そこで今回は、前田育徳会本の重文《日本往生極楽記》をあわせて展示し、浄土教の成立と展開の観点から《一遍上人絵伝》を捉え直してみたいと思います。

『日本往生極楽記』は、平安中期の漢詩人で仏教に深く帰依した慶滋保胤よしのげのやすたねが書いた平安時代の往生者の伝記集で、寛和年間(九八五～九八七)に成立しました。内容は、人々を浄土教に導くために聖徳太子、行基、円仁以下四十五名の往生者の略伝を記したもので、前田育徳会本は鎌倉時代前期の写本です。

《一遍上人絵伝》は、鎌倉時代の僧で時宗の開祖・一遍(一二三九～一二八九)の行状を描いた絵巻で、一二九九年に一遍の高弟・聖戒が詞書を作り、法眼円伊

が絵を描いたと伝えられています。絵巻には、この聖戒を開基とする山城国の善導寺を京都六条に移建した、歓喜光寺に伝わった全十二巻からなる歓喜光寺本と、一遍と第二祖の他阿上人の伝記を扱った宗俊の編による十巻本の系統があります。前田育徳会本は、奥書に「佐女牛室町新善光寺御影堂納物不可出門外者也」とあり、もと京都の御影堂新善光寺に伝わったことが知られることから「御影堂本」とも呼ばれ、歓喜光寺本系の十二巻からなる十四世紀の作です。御影堂にはかつて巻五、六を除く十巻が伝えられていたところを前田家は巻第一、二、四、九、十、十一、十二の七巻(重要文化財指定)を入手し、寺に残した巻三、七、八は模写して蔵しました。

第5展示室【近現代工芸】 特別陳列

きらめく美

北陸ゆかりの截金作家たち

6月20日(土)～7月26日(日) 会期中無休

平安時代から鎌倉時代の仏画や仏像の装飾に用いられ、高度に発達した「截金」。金などの箔をごく細かい方形や、髪の毛よりも細い線に切り、膠や布海苔で貼り付けて、文様を構成する技法です。貴族社会の終焉とともに衰退しましたが、京都の本願寺系仏画師の間に技法が継承されました。

近代を迎えた日本では、さまざまな工芸技術の無形文化財指定が進みました。最盛期の截金を復興、独立した工芸技術として優れた作品を発表し、重要無形文化財保持者(人間国宝)の認定を受ける作家が現れます。斎田梅亭(一九〇〇～一九八〇)、西出大三(一九一三～一九九五)、江里佐代子(一九四五～二〇〇七)です。西出大三は石川県加賀市生まれで、本年で没後二十五年を迎えます。この節目の年を迎える

にあたり、西出大三、高瀬孝信、山本茜の三名を、北陸ゆかりの截金作家としてご紹介します。

仏師を目指して東京美術学校に学んだ西出は、在学中に截金に出会いました。自ら木彫した器物に、抒情的な彩色と截金を施した作品を発表しました。

大阪府生まれで富山県に育った高瀬は、斎田梅亭の高弟として、受け継いだ技術をさらに究め、樹脂コーティングによる堅牢な截金作品を生み出しました。

金沢生まれの山本は、京都で日本画を学びながら江里佐代子に師事して截金を習得しました。富山でガラス成形を学んで、截金ガラスという新しい分野を切り拓き、今後の活躍が期待される作家の一人です。

三者三様のきらめく美の世界をご覧ください。



高瀬孝信《截金飾箱 花の城閣》砺波市美術館蔵

第2展示室【古美術】

加賀ゆかりの個性派絵師 守景・岸駒

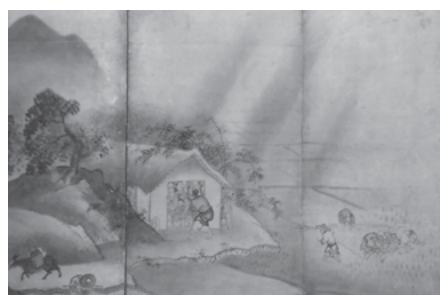
6月20日(土)～7月26日(日) 会期中無休

江戸時代、加賀藩は幕府に対する主体性の表明として、京都の後水尾天皇を範として戦略的な文化政策を展開しました。こうした文化風土と、江戸と京都との微妙な地理的距離は、金沢にある種の反骨精神を胚胎させる要因となりました。そして今回着目する久隅守景や岸駒が活躍した原動力も、この反骨精神だったと考えることができます。

守景は一六一〇年頃に生まれ一七〇〇年頃に没したと推測されます。当時江戸画壇の頂点にあった幕府御用絵師・狩野探幽門下の傑出した画家でしたが、後年何らかの確執があつて探幽の門を去りました。こうした守景の動向に、文化で幕府に優越することを文化政策の指針とした加賀藩が注目したことは当然です。そこで加賀藩の文化風土が、守景の家貧な

れどもその志高く、たやすく人の求めに応ずることなし(『近世崎人伝』一七九〇年)と伝えられた気骨と絶妙に響き合い、守景は加賀の地で画業を開花させることができました。

岸駒の出生については不明な点が多く、加賀藩の史料によれば、十二歳の頃に金沢の染物屋に丁稚奉公し、二十五歳で京へ上ったとされています。この時期、円山応挙から指導を受けた可能性が指摘されています。そして一七八四年に有栖川宮家御学問所の障壁画を描き、有栖川宮の近習となり、雅楽助の名を賜ったことにより、一流の画家としての地位を確立しました。一八〇九年には加賀藩主に招かれ金沢城に障壁画を描き、一八三八年に約九十歳で没するまで、京都や金沢で精力的に活動しました。



重要美術品《四季耕作図》久隅守景(左隻部分)

第3展示室【近現代絵画・彫刻】

優品選

6月20日(土)～7月26日(日) 会期中無休

第3展示室では、近現代純粹美術の展示を行います。季節は移り、初夏の花々の美しい頃となります。日本画の展示ではこの季節に相応しい花を愛でたいと思います。初夏を彩る花といえば牡丹でしょうか。牡丹は古来中国では、百花王、富貴花などと呼ばれてきました。日本画のモチーフとしても大変好まれ、有名などころでは村上華岳や加山又造が手がけています。今回の展示では稲元実《氣》など日本画の優品をご覧ください。

油彩画からは西房浩二の《Grave(グラヴエー)》や林武の《花(ばら)》など静物画の名品を紹介いたします。西房は石川県立工業高等学校に勤務した後、チェ

コ・プラハに一年間絵画留学しました。留学体験から学んだ、光の効果を最大限に生かし、モチーフの存在を際立たせる空間描写表現に特徴があります。

彫刻部門からは、坂坦道《チンドン屋》を紹介いたします。看板を背負い、ピエロの衣装を身に着けた人物。空を仰いで慟哭するような途方に暮れるような姿は、音楽と口上で街頭を湧かせる明るいパフォーマーのイメージとは正反対のものです。坂がこのモチーフにこめた感情の「複雑なもの」を味わっていただければと思います。



稲元実《氣》

第4展示室【近現代彫刻】

木と向き合う

6月20日(土)～7月26日(日) 会期中無休

本特集では、木の造形である木彫と、木版画を紹介いたします。

木彫は江戸時代まで日本彫刻の中心で、江戸期には非常に精緻なものとなりましたが、それらは近代化・西洋化の波とともに工芸的な「細工物彫り物」へと変貌していきます。西洋化を目の当たりにした木彫家たちは、写実的な作風を求められますが、徐々に写真からの脱却を目指します。大正時代から昭和戦前期にかけては、写実的でありながら作家独特の表現を感じることで作風へと変化します。そして現在に至るまでのあいだに、表現主義的で自由な木の造形が制作されています。材質である木の良さやぬくもりを残しつつ形作られているこれらの作品は、時代を問わず、作家が木という材質と向き合った

証でしょう。

また、木版画では棟方志功の作品を紹介しています。棟方は青森県に生まれ、上京して独学で絵を学び、白日会展、帝展などに出品します。また、民藝運動の中心人物であった柳宗悦らと交流を持ちます。昭和二十年には富山県福光町に疎開し、そこで多くの作品を手がけています。棟方は昭和十七年に出版された彼の随筆集『板散華』中で版画は「板画^{はが}」の字を使うと宣言しています。版画については「板から生まれる板による画」との認識を示し、版画を使う理由としては「板の声を聞き、板の命を彫り起こす」志を示すためと言われています。

木と向き合って完成された温かな造形作品・木版画をお楽しみください。



松井乘雲《日本武尊像》

企画展「没後35年 鴨居玲展 —静止した刻—」について

主催／石川県立美術館 共催／北國新聞社
企画協力／公益財団法人日動美術財団

※当初予定していた標記の企画展については、開催時期等について調整中です。

本年、没後三十五年を迎える洋画家鴨居玲の回顧展です。一九八五（昭和六十）年九月に五十七歳で急逝、その後五年ごとに開催されてきた巡回展も今回で七回目を迎えます。その他にも亡くなって間もないころから、追悼個展や回顧展が全国各地で開かれています。没後もこれほど永く人々に愛され、新たなファンを獲得し続ける画家は希有でしょう。

鴨居玲は、新聞記者である父が金沢に赴任してきた一九二八（昭和三年）、金沢に生を受けました。その後を京城（ソウル）、大阪と転居し金沢へ戻ります。そして金沢美術工芸専門学校（現金沢美術工芸大学、以下美専）の一期生として卒業するまで青春時代を、当地で暮らしました。

当展では、鴨居の画業を三期とするこれまでの考えを踏襲し構成しました。

一章「模索〜煩悶する若き画家〜」では、美専在学中から四十一歳での安井賞受賞にいたる画家の苦悩を中心に紹介します。

二章「画風の確立へ〜充実の日々〜」では、受賞後スペインに渡り、鴨居が「わたしの村」とよぶバルデペーニャスの人たちを題材に、自らの画風を確立していく充実期の作品群を紹介します。

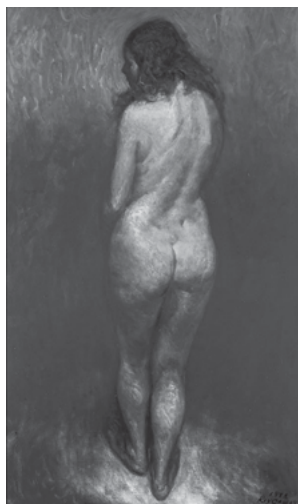
三章「終焉への道〜再びの煩悶〜」。鴨居は、帰国後さらなる芸術の高みを目指し、裸婦・女性像という新たな題材に取り組みます。そして《1982年私》（当館蔵）という最大の自画像を制作するに至る過程と、苦悩のすえに終焉を迎えるまでをご覧いただきます。常に「人間とは何か」を問い、自らの内面をえぐるように見つめつづけた鴨居玲。その軌跡を見つめ直す機会になれば幸いです。



《観音像》1948年 北國新聞社蔵



《おばあさん (B)》1973年 当館蔵



《Étude (B)》1978年
公益財団法人ひろしま美術館蔵

新収蔵となった作品

分類	No	作品名	作者名	員数	制作年	寄附者名
漆工	①	漆皮水指 「ほのあかり」	坂下 直大	1合	平成26年	坂下 信子
漆工	②	漆皮合子「笠雲」	坂下 直大	1合	平成27年	坂下 信子
染織	③	兼六園徽形灯籠 模様大島紬		1枚	平成27年	真野 君子
木工	④	櫻造拭漆盛器	水上 隆志	1口	平成11年	水上 京子
木工	⑤	櫻造多辺拵鉢	川北 浩彦	1口	平成23年	川北 浩彦
木工	⑥	栃李造食籠	中嶋 虎男	1合	平成26年	中嶋 虎男
木工	⑦	栃造器	中嶋 武仁	1口	平成26年	中嶋 武仁
木工	⑧	神代杉柱目造板目 象嵌八角箱	福嶋 則夫	1合	令和元年	福嶋 則夫
木工	⑨	神代榆重ね箱	福嶋 則夫	1重	平成23年	福嶋 則夫
木工	⑩	神代杉木象嵌 重ね箱	福嶋 則夫	1重	平成20年	福嶋 則夫
日本画	⑪	秋庭小禽図	雲嶺社中	1幅	明治30年頃	山崎 繁
日本画	⑫	五月雨	高村 右暁	1幅	昭和21年	山崎 繁
日本画	⑬	富士山水之図	玉井 紅嶺	1幅	明治期	山崎 繁
日本画	⑭	瀑布之図	玉井 紅嶺	1幅	明治期	山崎 繁
日本画	⑮	萩に小菊 (鶉草花図)	中濱 松香	1幅	明治35年	山崎 繁
日本画	⑯	人物遊興図	中濱 龍淵	1幅	大正期	山崎 繁
日本画	⑰	花鳥図	中濱 龍淵	1幅	大正8年	山崎 繁
日本画	⑱	蓬萊之図	鈴木 華邨	対幅	明治38年	山崎 繁
日本画	⑲	松蔭鷺鷥図	紺谷 光俊	1幅	昭和15年	山崎 繁
日本画	⑳	山間図	尾竹 竹坡	1幅	大正期	山崎 繁
油彩画	㉑	夢見る刻	六反田 英一	1面	平成30年	六反田英一
油彩画	㉒	狂詩曲	鈴木 治男	1面	平成3年	鈴木 治男
油彩画	㉓	若木のスペース	鈴木 治男	1面	平成21年	鈴木 治男
油彩画	㉔	水の記憶―復元	鈴木 治男	1面	平成28年	鈴木 治男

◆コレクション展「新収蔵品選」(第6展示室)にて一部を展示いたします。(会期…六月二十日～七月二十六日)

分類	No	作品名	作者名	員数	制作年	寄附者名
写真	④6	時をききむ無常 ―鑄一船―	富岡 省三	1面	平成27年頃	西出 和代
写真	④5	無常「老木の王」	富岡 省三	1面	平成23年	西出 和代
写真	④4	Door&Door 「PORTUGAL」	富岡 省三	1面	不明	西出 和代
写真	④3	置き去りにされた刻	富岡 省三	1面	平成20年代	西出 和代
写真	④2	縄梯子	富岡 省三	1面	平成24年	西出 和代
写真	④1	無常の叫び	富岡 省三	1面	平成22年	西出 和代
写真	④0	時をききむ無常	富岡 省三	1面	平成22年	西出 和代
写真	③9	時の跡「聖者」	富岡 省三	1面	平成21年	西出 和代
写真	③8	想う	富岡 省三	1面	昭和62年	西出 和代
写真	③7	時ノ跡	富岡 省三	1面	平成26年	西出 和代
写真	③6	時の跡	富岡 省三	1面	平成19年頃	西出 和代
写真	③5	時の移ろい	富岡 省三	1面	平成18年	西出 和代
写真	③4	鏝の存在	富岡 省三	1面	平成16年	西出 和代
写真	③3	反照	富岡 省三	1面	不明	西出 和代
写真	③2	静寂	富岡 省三	1面	不明	西出 和代
写真	③1	麦の秋	富岡 省三	1面	不明	西出 和代
写真	③0	細波	富岡 省三	1面	平成2年	西出 和代
写真	②9	粧	富岡 省三	1面	昭和63年	西出 和代
写真	②8	白い指	富岡 省三	1面	昭和61年	西出 和代
写真	②7	白日夢	富岡 省三	1面	不明	西出 和代
写真	②6	赤い靴音	富岡 省三	1面	昭和57年	西出 和代
彫塑	②5	偵察	吉田 三郎	1点	昭和16年	田中 幸子

令和2年度の展覧会予定

二〇二〇年は、東京オリンピック・パラリンピックに加え、国際北陸工芸サミットの石川県開催もあって、年間を通して企画展を予定してきました。また、コレクション展示でも古美術・工芸・近現代美術部門それぞれにテーマを定め、ミニ企画を計画しており、多くの方から期待を集めていました。

ところが本年早々からの新型コロナウイルス感染症の広がりで、日本国内はもとより、世界じゅうの美術館が休館し、展覧会の開催が見送られてきました。当館でも、「かおすがた・こころーいしかわゆかりの肖像ー」展「改組新第六回日展金沢展」が中止となり、コレクション展示室も公開されないまま約一ヶ月間の休館とせざるを得ないこととなりました。

状況が落ち着いてきた五月に入り、政府から「緊急事態措置の維持と緩和に関する通達」が示されました。十分な対応策を講ずることにより美術館・博物館を開館できることになり、当館でもその取り組みを進めた結果、五月十八日、コレクション展示室の開館にこぎ着ける状況となりました。しかしながら当面の間、県民の方に向けての限定的な開館となるほか、入館に際しても体温チェックやマスクの着用を

お願いするなど、まだまだ通常時の開館というわけにはいかない状況となっております。未だ県境を越えての移動に自粛が求められており、作品の借用計画にも支障をきたしていることから、外部からの借用を必要としない展示内容に変更せざるを得ないものや、場合によっては実施困難となる展覧会も出てくること予想されます。

現段階では、展覧会が予定通り行われるよう努力しておりますが、変更も予想されます。詳しくは当館のホームページ (<http://ishibi.pref.ishikawa.jp>) でご確認ください。

◆今後の展示について
今後の展示については、会期や内容が変更となる場合があります。最新の情報を当館公式ホームページ等でご確認いただけますようお願いいたします。

◆土曜講座について
六月二十七日に予定されていた土曜講座は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、中止となりました。ご了承ください。

次回の展覧会

令和2年7月31日(金)
～8月30日(日)
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
前田利為の 文化業績	よみがえった文化財 修復工場の修復実績
第3・4展示室	第5展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	キラキラ×工芸 【近現代工芸】
	第6展示室
	夏休み 親子で楽しむ美術館 もっと、いしかわ 【近現代絵画・彫刻・工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料
一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金
6月1日は第1月曜日より
コレクション展示室無料の日

6月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

6月の休館日は
15日(月)～19日(金)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?

石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ

郵送配布!! 3,000部発行

ターゲットを狙った
知名度向上

県立美術館発行の
信頼度の高い広報媒体

お問い合わせ 092-716-1401

株式会社ホープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財務確保 株票

石川県立美術館だより
第440号(毎月発行)
2020年6月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。